経営学部　思考を磨く実践的な科目を開講

三宅准教授　ビジネス研究C

「好きなデザイン」テーマにプレゼン

「好きなデザイン」についてプレゼンする学生

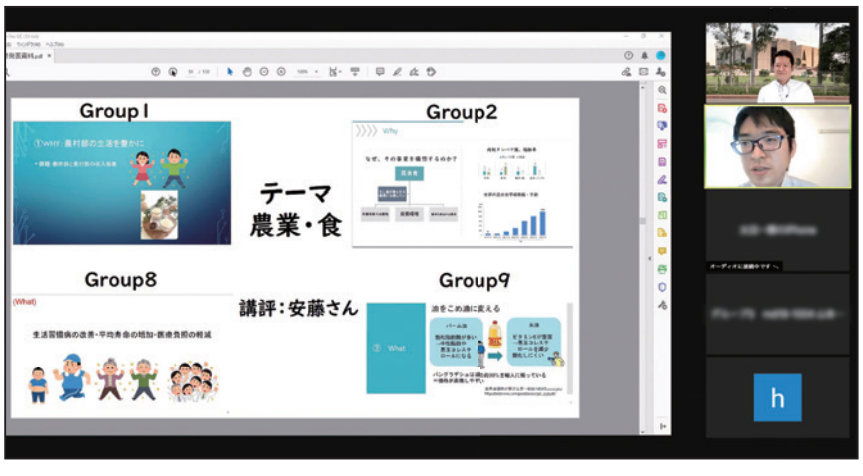
経営学部では、実践的な科目を通して自分自身のアイデアを具現化する方法を身につけ、ビジネスをデザイン（設計）する力を養う。三宅秀道准教授と辰野博一非常勤講師が共同担当の「ビジネス研究C（デザインと経営）」は、商品企画などの分野で活躍する3人の実務家を迎え、2、3年次生が演習形式の授業を通じて、組織や戦略を含めた広義のビジネスデザインについて多角的に学び、自分なりのデザイン観を築くことを目標にしている。

7月14日の授業で、学生たちは「私の好きなデザイン」をテーマにプレゼンテーションを行った。三宅准教授が「感性を発揮しつつ、いかに論理に落とし込めるかがポイント」と話すとおり、学生たちは具体例を示しながら、そのデザインを好きだと感じる理由を論理立てて説明することに挑戦した。

石黒まゆさん（2年次）が具体例として挙げたのはラムネ瓶。「夏っぽさを感じる」理由を考察し、ラムネ瓶の意匠の特徴を「視覚・聴覚的な涼しさ」「夏を連想させる形」という要素に整理した。吉松瑞生さん（3年次）は、「理性」で選んだフットクリームと、「直感」で選んだ腕時計という二つの愛用品を示した。

講評では、実務家の講師陣からビジネスシーンさながらの踏み込んだ指摘や質問が相次ぎ、学生との間で緊張感のある質疑応答が行われた。三宅准教授は「『好き』という感覚を、理由まで問い詰めて論理的に説明する難しい発表テーマだったが、頑張ってやり遂げてくれた」と学生たちの努力をねぎらった。

オンラインで行われたビジネスプラン最終発表会。上が見山特任教授



見山特任教授　ビジネスデザイン特講

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

バングラデシュの課題解決へプラン発表

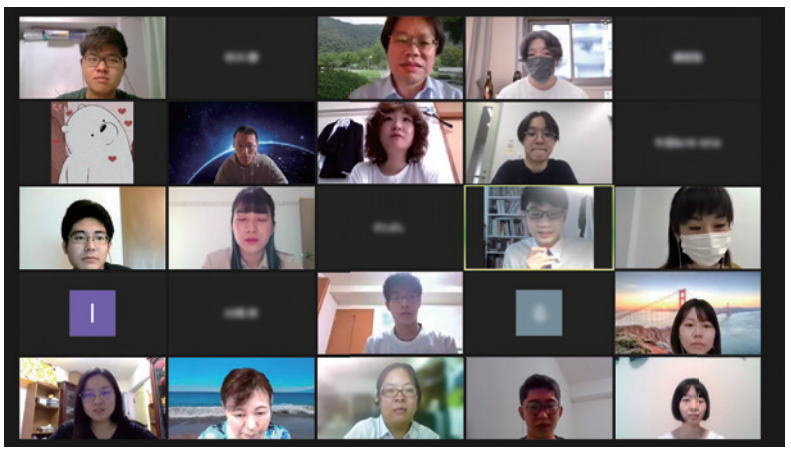
経営学部ビジネスデザイン学科を中心とした3、4年次によるビジネスプラン最終発表会が7月16日、オンラインで開催された。見山謙一郎特任教授の「ビジネスデザイン特講」（3年次対象）、「ベンチャー創造と事業継承特講A」（4年次対象）の受講生58人が11グループに分かれ、バングラデシュの「農業・食」「教育」「廃棄物、公衆衛生等」をテーマにアイデアを披露した。

「農業・食」では、米の付加価値向上による農村部の貧困の解決、昆虫食の普及や食生活の改善のためのビジネスプランなどが、「教育」では、通信教育ビジネスなどのアイデアなどが提案された。「廃棄物、公衆衛生等」では、水やゴミ、健康や雇用などの問題に対して、現地の文化的背景を考慮した提案が発表された。これまでの授業で学んできた現地の課題や現状、SDGsの考え方などを踏まえて、バングラデシュの市場で、未来に向けた事業をゼロベースから構想した。

ジェトロ・ダッカ事務所の安藤裕二所長が現地からオンラインで参加。一つ一つの発表に対して「バングラデシュでは宗教と生活が深く結びついているという視点を持って、さらに検証してほしい。また、日本がバングラデシュから学ぶこともたくさんあるので、取り入れていってほしい」などと講評した。

見山特任教授は「バングラデシュという未知であるが、成長著しいリアルな市場で、ビジネスプラン作成の過程を実践的に学ぶことは、社会課題の解決に経営学的思考が生かせることに気づくとともに、SDGsを体系的に理解することにもつながる」と語った。

共同授業に参加した両大学の学生たち



文・板坂ゼミ ― 台湾・輔仁大学

文学・文化への理解深める

オンラインで共同授業

文学部日本文学文化学科の板坂則子ゼミの学生たちが7月6日、台湾の輔仁大学（新北市）とのオンラインによる共同授業に参加した。

板坂ゼミでは10年以上前から、海外の大学と専修大学を結ぶネット授業を定期的に実施してきた。輔仁大学との共同授業は2年ぶりで、この日は「文学と文化から考える日本と台湾の特徴」をテーマに、双方の学生がプレゼンテーションソフトを使った発表と質疑応答を行った。

板坂ゼミA班の発表テーマは落語。「下半身の省略」「容易な場面転換」「聞き心地」など、漫才やコントにはない落語独自の特徴を挙げつつ、形を変えながら継承される日本の伝統芸能のあり方を検証した。

B班はファッションをテーマに選び、昭和から平成、令和にかけての流行の変遷を整理。「日本人は他人にどう見られるかを気にするためファッションも横並びになりがちだが、SNSの普及により手本とするファッションが多様化したことで、最近は個性の幅が広がっている」と論じた。

楊錦昌教授のもとで日本学を学ぶ輔仁大学の学生たちが台湾文学の特徴について発表すると、板坂ゼミ生からは踏み込んだ質問が相次いだ。学生たちにとって、日台の文学や文化、アイデンティティーに対する理解が深まる貴重な学びの場となった。

音を検知する様子を動画で紹介する小田切プロジェクト

プロジェクト中間発表開く

――ネット情報

ネットワーク情報学部3年次生のプロジェクト中間発表が7月10日、オンラインで開催され、27チームが2月から約半年間の活動をまとめた。

プロジェクトは、学生自らが課題を見つけチームを組み、これまで学修してきたさまざまな知識やスキルを活用し、1年かけて研究や作品制作に取り組む。中間発表には同学部の学生や教員らが参加。寄せられた意見を参考に、12月の最終発表に向けて改善していく。

小田切健太プロジェクトは、音楽的知識がなくても簡単に作曲ができる技術の開発を目指している。「だれでもできるDJ体験」として、画面上のアイコンに触れたり、拍手をしたりすると検知して音を追加できる。さまざまなジャンルのフリー音源から好みを選んで自分だけの曲を作ることを最終目標にしている。

望月俊男プロジェクトは睡眠改善に着目。眠る前にスマートフォンを手放せない若者が多いことから、スマホと距離を置くアイデアを出した。仲間とつながりながら共通の目標を作り、楽しく睡眠改善を図る。

トーチキスで履いた靴を持つ柳川さん

SNSで絆深め　灯つなぐ

聖火ランナー　柳川さん（法4）

柳川寛樹さん（法4）は東京五輪の聖火の点火セレモニーに、片方ずつ違う北海道のランナーの靴を履いて臨んだ。

柳川さんは、専修神田ボランティア（SKV）の前副代表。ボランティア精神を伝えたいと聖火ランナーに応募した。選ばれてから約2年間は、各地のランナーとSNSで交流を深めてきた。

箱根関所付近を走る予定だったが、新型コロナウイルス感染症対策のため公道でのリレーは中止になり、6月28日、藤沢市で聖火をつなぐ「トーチキス」が行われた。

その約2週間前に行われるはずだった北海道の聖火リレーも中止され、代表者による点火セレモニーが行われた。ほとんどのランナーは参加できず、「せめて靴だけでも」とのSNSの呼びかけに、柳川さんが手を挙げた。

トーチキスを終え、ステージを降りる時、左右でサイズもデザインも違う靴を脱いで掲げてみせた。靴には「コロナに負けない！」などの書き込みがあった。

柳川さんは「走ることはできなかったが、思いを引き継ぎ、灯をつなげることができた。コロナが落ち着いたら、北海道に会いにいきたい。全国のランナーたちとも、これからも交流を続けていきたい」と笑顔をみせた。